科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２６　年　　６　月　２３　日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２００７６

研究課題名（和文）視覚表現とコレクションの形成に見る縄文土器の美術的受容に関する研究

研究課題名（英文）Research on Jomon Pottery as Japanese Art: With a Focus on Visual Representation and the Creation of Collections

研究代表者
鈴木　希帆（SUZUKI, Maho）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・列品管理課登録室アソシエイトフェロー

研究者番号：８０６３３７１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円、（間接経費）　　690,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、通常は考古学の研究対象である縄文土器の美術としての研究を進展させ、その美を普及することを目的とする。具体的には国内外の博物館や美術館、個人の所蔵する縄文土器のコレクションの形成過程に関する調査と、描かれた考古遺物に関する調査を行った。
本調査により、パリの美術館に明治期の外国人宣教師による蒐集品が展示されている事例や、東京国立博物館に大正時代に縄文時代の遺跡が描かれた大型油絵が所蔵されている事例など、美術と考古学や人類学の境界を示す新資料を確認することができた。本研究成果は、研究論文の刊行や東京国立博物館での特集展示、他館での講演などにより広く公開し、研究目的を達成することができた。

研究成果の概要（英文）：This research looks at Jomon pottery, which is usually the focus of archaeological studies. This research aims to promote the study of Jomon pottery as art and to raise awareness of its beauty. Specifically, I conducted a survey on the processes of creating collections of Jomon pottery in museums both in Japan and overseas. In addition, I conducted a survey of paintings of archaeological remains. As a result, I was able to confirm new materials that show the boundaries of art, archaeology and anthropology. There is Jomon pottery on display in a Paris museum which was collected by a foreign missionary during the Meiji era. Another example is that the Tokyo National Museum possesses large, Taisho-era oil paintings depicting Jomon-period ruins. The results of this research were widely disseminated through the publication of an academic article, an exhibition at the Tokyo National Museum, and a public lecture at another museum. Through these activities, my aims have been attained.

研究分野：美学・美術史

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：縄文土器　日本美術　考古学　コレクション　近代　フランス・スウェーデン　明治　民族学・人類学

１．研究開始当初の背景

（1）縄文土器への造形的関心の高まり

縄文土器は今から約一万二千年前の紀元前一万年から四百年にかけて日本列島で焼成された素焼の土器であり、通常は考古学の研究対象とされている。日本美術の通史で初めて縄文を扱った考古学者・濱田青陵（『東洋美術史特集 日本美術史 第一冊 先史及原史時代』飛鳥園、1930 年）以降も、美術としての縄文土器研究は考古学者が主導してきた。この状況を打開する、美術史家による縄文土器研究の開始には、戦後の美術作家・岡本太郎による縄文土器論（「四次元との対話 縄文土器論」『みづゑ』558 号、1952 年 2 月）の登場を待たなければならなかった。この岡本の言説は後に単行本『日本の伝統』(光文社、1956 年）に収録されて一般に普及する。これを受けて、例えば 1963 年の『美術手帖』や『國華』における縄文土器特集に見られるように美術としての縄文土器研究も盛んに行われるようになっていった。そして現在では、芸術作品としての様式変遷や（青柳正規『新編 名宝日本の美術 第 33 巻 原史美術』小学館、1992 年)、縄文土器の持つ「かざり」への情念に注目した日本美術としての様式の連続性への言及など（辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版、2005 年)、美術史家による美術様式に根差した縄文土器研究が行われるまでに至っている。海外での土偶の展覧会（「THE POWER OF DOGU」大英博物館 2009 年）や国内の「美術館」における土偶の展覧会（「土偶・コスモス」MIHO MUSEUM2012 年）の開催も縄文時代の遺物への造形的な関心の高まりを示しているといえよう。

（2）岡本太郎以前の縄文土器への造形的な関心について

このように考古遺物の縄文土器は美術作品として認識されるようになったが、これまでの研究では、岡本の登場以前の縄文土器に対する造形的な関心については検証が進んでいない。そこで本研究者は、明治期に人類学の周辺で起こった縄文土器の図案化に着目し、図案と現存する実物の土器資料との照合調査を行い、近代における縄文土器への造形的関心の一端を明らかにした（「近代日本における縄文土器の受容―文様から全体造形への階梯―」第 63 回美術史学会全国大会於・学習院大学、2010 年 5 月、「近代日本における縄文土器観‐大野雲外の図案化を中心に‐」『美術史』第 171 号、美術史学会、2011 年)。この研究の過程で、好古家の記録、人類学、殖産興業政策下における工芸図案、さらには考古学、美術など、目的を異にしながら制作された縄文土器をモチーフとした視覚表現には、共通する美の様式変遷が存在することを確認した。上述の大野雲外の他にも、江戸後期の好古家や紀行家の記録（比良野貞彦『奥民図彙』、藤貞幹『好古日録』、菅江真澄『新古祝甕品類之図』、村上島之丞『蝦夷島奇観』、『耽奇漫録』など）や、明治期における博覧会の出品目録、大正時代の画家・蓑虫山人の絵画作品や江見水蔭の小説と挿絵などの調査により、近世から近代にかけて、東北の縄文晩期の亀ヶ岡の様式の土器や縄文後期の関東の注口土器など、器面に従属した静かな線による文様を持つ土器に造形的な関心が示されていることが明らかになった。これは、縄文中期の動的でアシンメトリーな造形様式の深鉢形土器を中心とする現代の造形的関心とは異なるものであった。この縄文土器への関心の変遷についてはすでに整理している（鈴木希帆『美術としての縄文に関する総合的研究』博士論文、2012 年)。一方、考古学史研究では、内田好昭氏が日本の集成図の受容について研究し（内田好昭「日本の集成図」『考古学史研究』第 5 号、1995 年)、その中で土器の描かれ方の変遷、日本考古学の実測図へと向かう歴史を示している。しかしそこでは、同時代の絵画環境や美術教育の影響は考察されてはいない。そこで本研究では、図譜や集成図から実測図へと向かう考古学と、図案、絵画、写真、立体造形へと向かう美術の、二つの縄文土器に関する視覚表現の傾向に注目し、その分岐点と要因、さらには相互の関係性を保持するものを確認しながら各研究領域における図像解読のコードの存在を検証していきたい。

また、考古学では資料の発掘時の報告書を重視し研究するため、出土状況の情報の乏しい近代の資料や、古物商、個人の収集家の資料の情報が公開される例は極めて少ない。そのため、縄文土器の博物館や美術館におけるコレクションの形成過程についても総合的な研究は行われていない。しかしながら、所有や蒐集の行為には、縄文土器への造形的な関心を探るための重要な情報が潜んでいることが推測される。美術としての縄文研究にはコレクションの形成過程の解明も重要である。

２．研究の目的

（1）日本美術における縄文土器の受容過程の解明

従来の縄文土器の美術的研究では、考古学の提示する草創期から晩期までの縄文時代の六時期区分の土器の技術発展史をもとにした作品解説や、岡本太郎の縄文土器論以降の、激しく動的な造形様式の縄文中期の土器を取り上げて、縄文土器の総体として扱う傾向にあり、個々の作品としての研究や受容史研究は重視されてこなかった。本研究では、考古学上の研究をふまえて、美術としての研

究を進展させ、その美を普及することを目的とする。そこでまずは、縄文土器の美術史への受容過程を明らかにしたい。この研究には、日本美術史の枠を超えた縄文土器を研究対象とした人類学、考古学、民族学などの、超領域の学際的な研究への発展の可能性が秘められている。また、本研究で用いる照合調査の手法はこれまでの研究においてすでに確立しており本研究は円滑に進めることが可能である。本研究成果は、考古学や人類学における研究成果とあわさることにより、強固な日本の先史観に関するデータベースが構築されるであろう。本研究はまた、近年国学や歴史学において注目されている好古家の実体の解明にも寄与するものと思われる。加えて、日本における原始美術の受容についての研究にも有益な資料を提供することとなり、近現代美術研究にも寄与することになるであろう。

（2）縄文土器の美的価値の普及

縄文土器は通常は考古学の研究対象であるため、多くの場合郷土史や考古学の博物館に展示される。その場合、展示方法の問題などによりその美的価値に気づくことは容易ではない。しかしながら、海外での展示や、相次ぐ国宝指定による出土地域の活性化事業など、個々の土器への造形的な関心は高まってきている。考古資料であることに加えて、芸術作品としての縄文土器が活用される機会が増えてきているのである。そのようなときに、美術史が貢献できることはあまりにも少ないのが現状である。そこで本研究成果により、縄文土器の芸術作品としての背景をしっかりと語り、美術史上の位置づけを提示していきたい。また、国内外の博物館や美術館におけるコレクションの研究データの蓄積と分析、それらの公開によっても、縄文土器の美的価値を発信していきたい。

３．研究の方法

本研究は、「A.視覚表現に関する調査」と、「B.美術館・博物館における縄文土器のコレクションの形成に関する調査」の二つの調査によって遂行する。以下にその具体的な方法と、年度ごとの実践事例を記す。

（1）「A.視覚表現に関する調査」

視覚表現とは絵画作品や写真のなどの表現媒体を指す。ここでは描かれた土器や、写真に写された土器の調査を行う。

具体的には考古遺物が描かれた絵画作品と、モチーフとなった考古遺物を照合し、作者の視点を検証することにより、その人物や時代の縄文土器に対する造形的な関心を明らかにする。これらの研究により、内田氏及び桜井準也氏（『心と形の考古学』2006 年）などの考古学史研究における集成図の視点に関する研究成果に、新たに絵画環境および絵画教育の影響に関する考察を加えて、考古遺物に対する視覚表現の実体を複合的に考察する。

近代以降では、蒐集や集成の記録のほかに、展覧会図録への写真の登場、さらには土器の造形に触発された絵画や写真、陶芸作品などなどが登場するようになる。本研究では、これらの自律した美術作品としての縄文土器観の登場にまでを考察範囲とする。

〔年度毎の具体的な研究〕
①平成 24 年度
明治期から昭和初期にかけての好古家の縄文土器への関心を探る研究の一環として、青森県立郷土館と弘前大学亀ヶ岡文化研究センターの成田氏資料についての調査を行った。本調査では蓑虫山人作の資料に東京国立博物館所蔵遺物との関連性が見出された。本調査成果は次年度の東京国立博物館での特集陳列の基礎資料としても活用することができた。このほか、大阪大学学術総合博物館に寄託されている日本の前衛芸術を代表する画家・吉原治良の縄文土偶のスケッチの調査を行い、岡本太郎による縄文への造形的な評価以前に存在した、関西の美術家たちによる縄文への関心の実態に迫ることができた。
②平成 25 年度
所属する東京国立博物館所蔵の縄文時代や古墳時代の遺跡が描かれた大型油絵（大正時代作）や古墳時代の人物を描いた掛軸（昭和初期作）などの考古学に関係する絵画作品を調査し、館蔵の実物の考古資料と照合調査を行い、博物館における美術と考古学の関係について考察した。これにより研究目的に掲げた日本美術における考古遺物の受容過程の一端を明らかにすることができた。また、本調査成果をもとに東京国立博物館での特集陳列を行い、研究成果を一般に公開した。
本調査の過程では、明治から昭和初期にかけて考古学研究者に流行していた遺物や遺跡に関係する絵葉書などの視覚表現媒体にも着目し、同時期の写真や図画教育、絵画技法との関係についても考察を進めた。

（2）「B.美術館・博物館における縄文土器のコレクションの形成に関する調査」

先述の視覚表現に関する調査と並行して、国内外の美術館や博物館の所蔵する縄文土器に関する調査を行う。

〔年度毎の具体的な研究〕
①平成 24 年度
国内では、京都大学文化財総合研究センター、是川縄文館、京都造形芸術大学芸術館などのコレクションの調査を行った。海外では、

フランスのギメ東洋美術館及びチェルヌスキ美術館で調査を実施し、明治時代に国外に流出した日本の考古遺物が、日本の美術作品として展示されている海外の実状を調査し、その経緯についての研究を行った。フランス国立図書館でも関係する資料の収集を行った。

②平成 25 年度

国内では、近代における古物収集の実態についての研究を進めるため、考古遺物の蒐集家として著名な埼玉県の根岸家において、遺物や古写真の調査を行った。そのほか東北歴史博物館などで考古遺物の蒐集に関する展示を見学した。海外では、スウェーデン・ストックホルムの東洋美術館及び図書館にて、東京国立博物館所蔵の紀州徳川家旧蔵資料と関係のある縄文土器の調査を行った。本調査により、前年度の調査で明らかになった 19 世紀末のフランスにおける縄文土器への民族学的な関心とは異なる、20 世紀初めのスウェーデンにおける先史考古学としての縄文土器の受容状況の一端が明らかになった。海外調査では、ヨーロッパと日本の先史芸術観の比較に有益な資料を収集することができた。本研究成果については現在論文を執筆中である。

４．研究成果

本研究の成果は、1 件の学術論文の刊行（査読有）と、1 件の東京国立博物館における展示の開催、3 件の招待講演などによってほぼ当初の計画通り公表することができた。以下に具体的な内容を記す。

（1）論文発表

①「ギメ東洋美術館所蔵の縄文土器―フォリー神父蒐集品の調査報告を兼ねて―」（『武蔵野美術大学研究紀要』第 44 号（査読有）2014 年）

本稿は、平成 24 年度の「B.美術館・博物館における縄文土器のコレクションの形成に関する調査」の成果の一部である。日本の造形にいち早く関心を示した国フランスの、ギメ東洋美術館に所蔵されている縄文土器と関連文献の照合調査をもとに、海外の芸術環境における縄文土器の受容過程について検証した。

文献資料の調査により、19 世紀末の博覧会の時代に、植物学者としても知られるパリ外国宣教会の日本北部担当司祭が、トロカデロの博物館に縄文土器や土偶、石器などの考古遺物を送付していたこと、それらが当時のヨーロッパでアイヌ関係の民族資料として認知されていたこと、縄文晩期の「亀ヶ岡」という遺跡の土器が珍重されていたことなどを明らかにした。収蔵庫と展示室における照合調査では、明治期に蒐集されたこれらの土器が現存し、その一部は日本展示室に展示されていることも確認した。明治期にはフランスにおける縄文土器の蒐集の傾向が、縄文晩期の「亀ヶ岡」の様式の土器に特化していたが、戦後は縄文中期の関東出土の土器が注目されるようになり、ここに、美術館における縄文土器の蒐集上の様式の変遷が存在することも検証している。この傾向は日本国内と同調したものであった。本論文では、民族学的な関心から、現代の日本美術としての関心へと、日本国内の影響も受けつつ変化する、海外における縄文土器の受容の実態の一例について検証することができた。

パリのギメ東洋美術館に縄文土器が所蔵されていることは考古学者のうちには知られていたが、その収蔵の経緯や具体的な数量などについては今まで明らかにされていなかった。本稿は日本美術史のほかに、「亀ヶ岡文化」の検証が進む青森県の考古学や日本考古学史、民族学、博物館学などに今後の研究の広がりが期待される。

（2）招待講演

①神奈川県立歴史博物館「勝坂縄文展」記念対談「縄文土器を美術史と考古学から語る」2013 年 2 月 2 日、神奈川県立歴史博物館（招待講演）

本講演会は平成 24 年度の「A.視覚表現に関する調査」のうち、岡本太郎撮影の縄文土器の写真や吉原治良の縄文土偶のスケッチの調査成果をふまえて発表したものである。

岡本太郎が最も注目していた縄文中期の激しい文様をもった土器（勝坂式）の特別展示会場の博物館で、展示企画者の千葉毅氏（神奈川県立歴史博物館学芸員・考古学者）と公開対談を行った。日本美術史と考古学それぞれの研究立場に立ち、縄文土器研究の現状と問題、両分野の共同研究の可能性について意見交換を行った。同館で開催した「勝坂縄文展」では、岡本太郎が撮影した縄文土器の写真とその被写体となった土器を一緒に展示し、さらに岡本の視点を追体験できるようにカメラのファインダー越しに土器を見られるように展示し、会場照明は東京藝術大学が協力するなど、いままでの考古学の展示にはない、土器を芸術作品として見せるための工夫が随所に行われた。縄文土器の芸術性についての問題提起が積極的に行われた本展示に携わり、発表することにより、研究目的の一つである「縄文土器の美的価値の普及」を実現することができた。

②茅野市美術館、信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野　主催講演会「線を遊ぶ、語る ～縄文から現代まで～」講演者：金井直（信州大学准教授）、松本透（東京国立近代美術館副館長）、伊藤理佐（漫画家）、鈴木希帆（東京国立博物館アソシエイトフェロー）、文谷有佳里（作家）、2013

年 11 月 23 日、茅野市美術館（招待講演）
本講演会は、造形作家の公開制作に関連して、作家、美術史家、漫画家が自身の制作や研究の対象とする作品の、「線」について発表を行った。本研究者は日本美術史研究者の立場から、「縄文土器の線について」発表した。国宝・縄文のビーナス（土偶）など造形的に優れた土器の出土地として有名な茅野市は、出土遺物と市民をつなぐひとつのツールとして、「考古学」のほかに「美術」や「芸術」を積極的に取り入れている。本講演での発表により、研究目的の一つである「縄文土器の美的価値の普及」を進めることができた。

③根岸友山・武香顕彰会　主催講演会「東京国立博物館所蔵の＜群集横穴図＞と＜埴輪 短甲の武人＞について」2013 年 12 月 1 日、熊谷市商工会（招待講演）
本講演会は、平成 25 年度の「B.美術館・博物館における縄文土器のコレクションの形成に関する調査」の成果の一部である。本発表内容は、明治期の個人による考古遺物収集に関する調査をもとに行った。調査の対象とした根岸家には、明治期における古物愛好の会「集古会」の会長を務めた根岸武香の旧蔵資料が現在も所蔵されており、屋敷内の一部を用いて古物陳列場としていた「蒐古舎」の跡も残されている。また、根岸家には H.シーボルトやお雇い外国人の E.S.モース、画家の五姓田義松なども訪れており、モースが遺物を描いた額なども残されている。これらは明治期の考古遺物に対する関心を探るための重要な資料である。発表は、根岸家が文化財保護活動や、考古遺物の流通において果たした役割、当時の考古学や人類学だけではなく文化全体に与えた影響などについて行い、あわせて東京国立博物館の所蔵となった根岸家旧蔵資料についても解説を行った。本講演は、同年の東京国立博物館で開催した、考古学と美術の境界を探る展覧会に関連している。埴輪についての発表が多くを占めたが、縄文土器の受容史研究も進展させることができ、有益な情報も得ることができた。

（3）展覧会

①「特集陳列 うつす・つくる・のこす－日本近代における考古資料の記録－」2013 年 9 月 10 日 ～ 2013 年 10 月 20 日 東京国立博物館 本館 特別 2 室

本展覧会は、研究方法「A.視覚表現に関する調査」と、「B.美術館・博物館における縄文土器のコレクションの形成に関する調査」の総合的な研究成果の一部である。研究協力者の東京国立博物館・古谷毅研究員と共同企画で行い、古谷氏からは考古遺物の由来や取扱い、展示会場の構成について協力を得た。
博物館という、モノを展示して見せるための工夫が求められる場所において所蔵されている「描かれた考古遺物」には、現状記録のためのもの（模写）、作品の理解を促すためのもの（背景パネルにあたる絵画や、遺物の着装や使用時の復元図）など、考古学の実測図とは別に考古学者と芸術家の協働により制作され独自に発展した視覚表現作品が存在する。この館内資料の調査結果をもとに、展覧会では、明治期から昭和初期にかけて制作(製作)された模造品や絵画などの考古学に関する資料と、そのモデルとなった原品（実物の考古遺物）の比較展示を行い、制作目的や美術的な背景について検証を行った。ここで描かれた考古遺物には、「現状の把握」につとめた明治から大正期、「過去の復元」につとめた昭和初期から現代までというような違いがあることも提示した。 本展示では、作品の当時の制作目的を検証するだけでなく、その今日的な美術史や考古学の学術資料としての評価につなげることができた。また、会期中は作品解説やブログでの情報発信を行い、研究成果を広く一般に公開した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
① 鈴木希帆、ギメ東洋美術館所蔵の縄文土器―フォリー神父蒐集品の調査報告を兼ねて―、武蔵野美術大学研究紀要、査読有、第 44 号、2014、pp.101-113

〔学会発表〕（招待講演　計 3 件）
① 鈴木希帆、「東京国立博物館所蔵の＜群集横穴図＞と＜埴輪 短甲の武人＞について」、根岸友山・武香顕彰会主催講演会（招待講演）、2013 年 12 月 1 日、熊谷市商工会

② 金井直（信州大学准教授）、松本透（東京国立近代美術館副館長）、伊藤理佐（漫画家）、鈴木希帆（東京国立博物館アソシエイトフェロー）、文谷有佳里（作家）、「線を遊ぶ、語る ～縄文から現代まで～」、茅野市美術館 信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野主催講演会（招待講演）、2013 年 11 月 23 日、茅野市美術館

③ 鈴木希帆 （企画者：千葉毅学芸員）「縄文土器を美術史と考古学から語る」
平成 24 年度かながわの遺跡展「勝坂縄文展」記念対談「縄文土器を美術史と考古学から語る」（招待講演）、2013 年 2 月 2 日、神奈川県立歴史博物館

〔その他〕
ホームページ等
企画した展覧会の関連ホームページ
① 考古学と美術の出会い「特集陳列 うつす・つくる・のこす」のみどころ（1）
http://www.tnm.jp/modules/rblog/index.php/1/2013/09/23
② うつす・つくる・のこす－日本近代における考古資料の記録－
http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1630

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　希帆（SUZUKI, Maho）
独立行政法人国立文化財機構
東京国立博物館・学芸研究部列品管理課
登録室・アソシエイトフェロー

研究者番号：80633718